

白 詩集

い

旅

人

せいしろう

青山ライフ出版

詩集 白い旅人 ■ もくじ

まえがきとして

辺境の地

辺境の地 その二

辺境の地 その三

記念日

川

気高い巨人

休息する人

天上生活

幻の楽器

幼い子と秘密にみちた花

聖地

運命

7

8

11

13

15

16

16

17

18

19

20

20

22

女神を救え	23
境域	24
霧の国	24
マリアから若者へ	25
聖なる女	26
中世の天文台	29
新しい生命のはじまり	31
無題	33
復活	34
地上の美	36
太陽が生まれた日	37
魔法の鏡	38
創世記	39
神と憐れなものの対話	40
自然の中で	41

エデンの園	42
イシスの嘆き	43
オシリスの思い出	44
真夜中の奇跡	45
光の群れ	46
ふたつの印	47
夏至	48
遡行	49
輪廻	51
荒野の啓示	53
鏡の中の人たち	55
魂の遍歴	58
師と弟子	61
舞台劇	64
母娘の部屋	64

夕闇の中

マリアの教室

小さな物語

星空と女の子

あとがき

76 73 73 69 65



## まえがきとして

子供のころからわたしには、ふたつの自分だけの秘密があった。ひとつは、数字には固有の色が備わっている、ということだ。たとえば3には緑が、8には青がというようにである。不可視なことなので誰にも言えなかった。もうひとつは、かなり小さい時に「自分とはいったい誰なのだろう？」と突然思ったことである。

自分の真実の姿を知ることほど、困難なことはないであろうし、また人間として最高の義務でもあると思う。そのためにひとはいろいろな試みをする。わたしは音楽や絵画にも関心があるが、とくにことばの世界において、より本来の自分と向き合えるのだと感ずるようになった。

わたしは詩の厳密なルールを知らないのです、このような本を出版するのはだいそれているかもしれない。しかしほかにどんな取柄があるだろう。自由なところで感じたことを自由なことばで発したい。小鳥がよるこびをもつてさえするように。わたしはこうして自分を世に送り出す。

せい しろろ

## 辺境の地

爽やかな青い空に、太陽が昇るころ、  
私はひとり目を覚ます。

それは全く自由な気分で、  
遠く果てしのない高みに行く  
白い旅人に似て爽快だ。

人々が群れなし　ざわめく所、  
文明の中心地というものを  
私はあまり好まない。もっと遠くへ  
魂は憧れる。人々が辺境と呼ぶ地こそ  
好ましい。

旅の持ち物は最小限、“たったのそれだけ？”と  
他人から言われる程。